

# ミルクたっぷりの酒（ブクログ のパブー版）ーオカルト編・エ ッセイ編

小野ユージン

## 幽霊も進化するのか

---

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年11月18日公開

幽霊が実在し、かつ進化論的な学説が正しいのなら、幽霊も進化したのだろうか。太古の時代に最初の生命体が誕生し、その生物の死によって最初の幽霊も誕生したのか。生物の進化にともない、幽霊も進化してきたのだろうか。

幽霊実在論者のなかには、霊は人間の霊だけではなく、動物などの低級霊も存在していると主張している人もいるから、この人たちは幽霊進化論を唱えているのだろうか。ただ、狐などの霊の話は聞いたことがあるが、ゴキブリやミミズなどの霊が存在するという話は聞いたことがない（私が聞いたことがないだけかもしれない）。

霊は精神的な存在なので、下等生物の霊は存在せず、高等生物の霊だけが存在するのかもしれない。それだと、生物進化のどの段階でどのようにして霊が存在するようになったのかという疑問が生じる。

まあ、幽霊実在論者は進化論的な考え自体を否定している人が大半なのかもしれないが。その場合は、生命の誕生や生物の多様性について説得力のある仮説を提示できなければ、幽霊の存在自体信じてはもらえないと思うけれども。

## 霊能者は何をみているのか

---

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年11月19日公開

幽霊がみえると主張している人たちが全員嘘つきでないのなら、彼らは何をみているのだろうか。この場合、幽霊が視覚としてはっきりと眼に見える形で認識されているのか、それとも眼にみえているわけではなく、その存在が感じられているだけなのかが問題となる。

存在が感じられているだけの場合は、幻覚・ただの思い込みである可能性も高い。あるいは空気の微妙な変化を感じ取れる特殊な能力をもっていて、その空気の変化を本人は幽霊と認識しているのかもしれない。

視覚として見えている場合は、幻視-脳の特異的な能力あるいは機能障害により、実際には存在していないものが見えていると感じているのかもしれない。あるいは、普通の人にはみることのできない空中に舞っている塵や埃をみる人並み外れた視力をもっていて、本人は空気中の塵や埃を幽霊と認識しているのかもしれない。

「霊能者は何をみているのか」という問いへの答えとして一番面白かったのは津田庄一（ゆうむはじめ）の仮説だった。（津田庄一『京極堂の偽』データハウス。ゆうむはじめ『宣保愛子 霊能力の真相』より）

宣保愛子は人間の記憶をみることのできる特殊な能力をもっていて、本人はみた記憶を幽霊だと認識しているのではないかという説だったはず。もちろん、人間の記憶をみるという考えは幽霊同様非現実的な話だから、幽霊の存在を信じていない人はこの説も馬鹿馬鹿しい話だと一笑にふすだろうが。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年11月20日公開

数年前テレビでみた、江原啓之、美輪明宏出演の番組（「オーラの泉」）で、前世の人間が守護霊として後ろから見守っているという主張をしていた。

生まれ変わりということが実際にあるのか、守護霊というものが存在するのかは一旦脇に置くが、「前世の人間が守護霊になっている」という主張には違和感をおぼえた。

前世の人間が生まれ変わったのだとしたら、その存在は現在生きている人間となったのだから、守護霊として霊だけが残っているのは論理的におかしいのではないか。人間は死後、肉体は滅びても霊魂は残り、その霊魂が守護霊として存在するのなら、生まれ変わりということはおこらないのではないか。

霊と魂は別のもので、人間は死後、霊は守護霊のような形でこの世かあの世に残り、魂だけが肉体を伴って生まれ変わってくるというのなら、論理的には矛盾が生じないのかもしれない。

その場合、魂の数は一定数を保っているが、人間が生まれて死ぬごとに霊の数は増えているわけだから、あの世やこの世では霊の数が無数に増え続けることになるのではないか。（江原啓之の著作は読んだことがないので、暇があったら読んでみて、そのあたりどう説明しているのか確かめてみようとは思っている。）

一頃、前世ブームがあったが、生まれ変わりというものが実際にあったとしても、大半の人間の前世は無名の農民だろうから、前世が貴族だったとか有名人だったという言説は嘘くさくて信用できない。無名の人間は生まれ変わらず、有名人のみが生まれ変わるという考えなのだろうか。そうだとすると死んだ有名人の数と生きている無名人の数が釣り合わないが……。このあたりのことは多くの人が同じことを考えていたようで、数年前に読んだ江原啓之を批判した雑誌でも指摘されていたが。）

## 幽霊は実在するのか

---

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年11月21日公開

私はオカルト現象とかは子供の頃から好きだったが、基本的にはエンターテイメントとして楽しんでいるので、幽霊の実在とかを信じているわけではない。かといってオカルト現象を嘘や虚構だといって全否定しているわけではない。

科学的に存在が証明されていないものを、存在すると主張するのは知的に不誠実だろう。だが、「科学的に存在が証明されていない」ということは、そのものが存在していないわけではない。

「現在、幽霊の存在が証明されていない」ということから次のケースが想定できる。

- 1・幽霊は存在していないので、（存在を）証明できるわけがない。
- 2・幽霊は存在しているが、人間の知的レベルがまだその存在を証明できるレベルに達していない。
- 3・幽霊は存在しているが、その性質は人間の知性で証明できるものではない。そのため、人間が幽霊の存在を証明することは永遠にできない。

（以上述べたことは、90年代半ばに宝島社から発売されたオカルト関連のムック本の中で、呉智英が同じようなことを言っていた気がする。ただし、15年近く前、立ち読みでみただけなので、記憶違いの可能性もある。）

幽霊実在論者は、幽霊の存在を証明すれば嘘つき呼ばわりされずにすむが、もし幽霊の存在が3のケースだった場合、存在を証明することはできないので永遠に嘘つきよばわりされる。

一方幽霊否定論者は、幽霊の存在が1のケース（幽霊は存在しない）であり、2か3のケースでないことが証明できない限り、幽霊が絶対に存在しないとはいいきれない。幽霊否定論者にできることは、「幽霊の存在は科学的に証明されていない。」と発言することだけだといえる。不可知論的な立場にたたない場合、両者の議論は水掛け論におわるのが関の山だろう。

幽霊否定論者やオカルト否定派は、幽霊実在論者を馬鹿馬鹿しい、非科学的だといって笑っているかもしれない。だが、この世の中で一番神秘的で不可思議で人間の知性では説明つかない出来事は「生命が誕生した」ということだろう。生命誕生の不思議さ（いいかえれば不気味さ）に比べれば、「幽霊実在説」なんてものは赤ん坊のようなものにすぎない。生命誕生の神秘が謎のままであり続ける限り、科学的な立場から「幽霊は存在しない」と主張しても、説得力はあまりないような気がする。

「幽霊実在説」に対する私自身の考えは、建前としては半信半疑の立場をとっているが、本音としては6：4か7：3の割合で存在するのではないかとも思っている。ただ、「幽霊も靈魂も存在せず、人間は（人間に限らず生命は）死んだらただの肉体（物質）の塊になるだけだ」という、唯物論的な考えが真実かもしれないと考える理性は残っているけれども.....。

## 恋愛・結婚の不平等に関して

---

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年4月23日公開

「もてる・もてない」、「交際相手がいる・いない」、「結婚相手がいる・いない」、恋愛や結婚に関して不平等さを感じている人はかなりいるのかもしれない。

経済的不平等は、思想・理論のレベルでは政治の力によって解決することが可能かもしれない。だが、恋愛・結婚に関する不平等は、思想・理論のレベルでも解決することは困難だろう。

恋愛の自由、結婚の自由という概念を否定して、交際相手・結婚相手の欲しい人には、政治の力によって強制的に相手と結び付けるといふ政策を実施すれば、パートナーがいないという不満は解消できるかもしれない。ただ、交際相手・結婚相手さえいればそれが好きな相手でなくてもいいと考えている人以外は、幸福感は得られないだろうし、このような政策に反対するだろう。

ハローワーク（職業安定所）のような、公営の交際相手・結婚相手紹介所を設立すれば、パートナーがいないことに悩む人は多少（かなり？）減少するかもしれない。だが、相手に断られるケースもあるのだから、結局は個人の問題に還元されるだろう（まあ、税金を使ってそのような施設をつくることに賛成する人は少ないだろうけど）。

政治の力で解決することが出来ない問題は、個人の力でどうにかするしかなく、個人の力でどうにも出来ないことが悩みとなっている場合は、袋小路においつめられてしまうだけだろう。

恋愛・結婚に関する不平等感、世の中が不公平・不公正・不平等なものにすぎないという現実をより切実に感じさせるだろう。（「もてる人ともてない人がいる」という状況を不平等と表現することが適切か、という疑問はこのころが。）

## 女性の方が背の高いカップル

---

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年11月9日公開

異性間のカップル・夫婦の場合、男性の方が背が高いのが普通の形であり、女性の方が背の高いカップル・夫婦に対しての偏見、好奇の目は根強くある。昔に比べれば、女性の方が背の高いカップル・夫婦に対しての偏見は薄れてきてはいるが、それでもまだ多くの人がカップル・夫婦は男性の方が背が高いのが普通だといった価値観に縛られているといえる。

この価値観は、「男性の方が女性よりも価値が上にある」「大きいことが小さいことよりも価値が上である」「上記2つの価値観では、“男性の方が女性よりも上だ”という価値観の方が優先される」、以上3つの価値観が複合された結果できあがった価値観だといえる。

「大きいことは小さいことよりも上である」という価値観の方が、「男性の方が女性よりも上である」という価値観よりも上位にある場合、女性の方が背の高いカップル・夫婦では、背の高い女性の方が背の小さい男性よりも偉い（価値が上にある）ということになるだろう。

女性の方が背の高いカップル・夫婦に対しての偏見があるのも、男性優位社会の中で、女よりも偉いはずの男が女よりも背が低いのは許せない（おかしい）という価値観があるからであり、また「大きい方が小さい方よりも上である」という価値観を人々がもっていなければ、女性の方が背の高いカップル・夫婦に対しての偏見なども生まれることはなかっただろう。

さらには、「小さい方が大きい方よりも上である」という価値観が主流であったならば、男性の方が背の低いカップル・夫婦が普通の形とされ、女性の方が背の低いカップル・夫婦が偏見、好奇の目にさらされていたかもしれない。（ただし、多くの国・地域で、ほとんどの時代、男性の方が女性よりも平均身長が高かったから、男性の方が背の高いカップル・夫婦の方が確率的には多くなるはずである。女性の方が背の高いカップル・夫婦に対しての偏見があったのも、社会の中の少数派に対しての偏見があったからかもしれない。）

多くの人間は、男は自分よりも背の低い女性を交際相手・妻として求める傾向があり、女は自分よりも背の高い男性を交際相手・夫として求める傾向がある。

「男性の方が背の高いカップル・夫婦が普通の形である」という長年続いてきた社会的価値観を、無意識のうちに受け入れているからだとも考えられるし、「自分より体の小さい女性を守りたい」「自分よりも体の大きな男性に守られたい」という意識を多くの人々がもっているからかもしれない。（男性の方が女性よりも平均身長が高いから、身長にこだわらずに交際相手や結婚相手を求めたとしても、「男性の方が背の高いカップル・夫婦」の方が数は多くなるはずだけれども。）

少数の男性は、マゾヒスティックな感情をみたしたくて自分よりも背の高い女性を交際相手に求めているかもしれないし、男性に優越感をもちたくて自分よりも背の低い男性を交際相手に求めている女性もいるかもしれない。

自分が好きになった相手がたまたま自分よりも背が高かった（あるいは低かった）だけで、身長にこだわらずに交際相手や結婚相手を決めるほうがいいような気もするが、長く続いてきた社

会的価値観（社会の中で主流となっている価値観）から自由になるのはなかなか難しいものでもある。

## 男の価値は収入によってきまる？

---

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年11月22日公開

男の価値は収入の大小によって決まる、と考えている人は多くいるだろう。「人間の価値を収入の多さで決めるべきでない」と考えている人も、内面では前述した価値観に縛られている場合が多い。男性であるならば、自分より収入の多い人間に劣等感を感じ、自分より収入の少ない人間に優越感をもつだろう。女性の場合は、収入の少ない男性を価値の低い人間と無意識的にみなしてしまっているだろう。

収入の大小で価値を決められてしまうのは男であって、女性の場合は収入が多いからといって必ずしも価値が高いとみなされないのが、男性（優位・中心）社会の名残だろう。

最近ではその風潮は少しずつ薄れてきたが、女性の場合は既婚か未婚かで価値がはかれることが多かった。結婚してない女性は、収入の少ない男性同様、社会的に価値が低いとみなされてきた。（女性に限らず、男性も独身者に対する偏見は根強くあったが。）

男の価値を収入の大小できめるという風潮が、歴史的にいつ頃生じたのかは不勉強にして知らない。こういう風潮あるいは価値観は早くすたれて欲しいとは思うが、長い間、社会の中で受け継がれてしまった価値観だから、この価値観から自由になるのはなかなか難しい。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2011年8月7日公開

シナ（支那）という言葉は呉智英などが言っていたように、元々は国や地域を表す言葉であり、侮蔑語・差別語ではないだろう。だが、おそらくは戦時中（もしかしたらそれより前の時代から）少なからぬ日本人が差別的・侮蔑的な意味を込めて使っていて、そのために戦後は差別語・侮蔑語とみなされるようになったのだろう。

実際、シナ（支那）という言葉は侮蔑語・差別語としてではなく、単に国や地域を表す言葉として使っている（いた）のは呉智英や浅羽道明など少数の人で、この言葉を使っている人たちは差別的・侮蔑的なニュアンスを込めている人が多い。（シナという言葉を使用したいが、中国に対して差別的・侮蔑的な感情をもっていると誤解されるのをおそれて、この言葉を使わない人もけっこういそうではある。）

自分は呉智英に対しては特に否定的な感情はもっていなかったのだが、90年代中頃「朝まで生テレビ」での発言を聞いてあきれたことがある。そこで、呉氏がなぜ中国という言葉を使わずシナという言葉を使っているのか、いくつか理由をあげていた。（うる覚えの記憶のため、多少ニュアンスにちがいがあってもいいかもしれない。）

「中国という言葉は中国人の中華意識のあらわれだから、日本人が使用するのは適切ではない」「シナを中国と表記すると日本の中国地方と紛らわしい」。他にもいくつか理由をあげていた。「日本の中国地方と紛らわしい」という説明は合理的な理由であり、呉氏があげた理由のなかでは一番説得力があった。

だが、次の発言を聞いたときには耳を疑った。「日本人がシナという言葉を使用することは批判するのに、欧米人がchinaという言葉（あるいはそれに該当する言葉）を使用することには何も言わないのは逆差別だ。」

中国人が、日本人がシナという言葉を使うことに抗議したり不快な感情をあらわすのは、中華意識を充たしたいからではなく、多くの日本人がこの言葉を侮蔑的・差別的意図を込めて使っていたからでしょ。

一方、欧米人がchinaという言葉を使っても抗議しないのは、欧米人はchinaという言葉は国や地域を表す言葉として使っているだけで、そこに侮蔑的・差別的意図がないからでしょ。

日本人がシナという言葉は侮蔑的・差別的意図を込めて使ったりしなければ、おそらくはシナという言葉を使うことに抗議などしなかったろう（それでも抗議していたのなら、呉氏の批判はもっともだといえるが）。

また、欧米人がchinaという言葉は侮蔑的・差別的意図を込めて使ったのなら、当然そのことに抗議するだろう。呉智英は、そんなこともわからない鈍い人だったのかと自分のなかでの評価はガタ落ちした。（もっとも、日本人がシナという言葉を使うことに対して多くの中国人が不快感を感じている。そのことを知っていながらシナという言葉を使っていたのだから、鈍いっちゃあ鈍いんだけどね。ただし、呉氏はシナという言葉は国や地域を表す言葉として使用しているだ

けで、そこに侮蔑的・差別的意図はないから、氏がシナという言葉を使うことを非難するつもりは少しもない。)

ちなみに自分は、「中国」という言葉は戦後のある時期から単に国や地域を表す言葉となり、そこに中華帝国の思想や中国人の中華意識が表されているとは思わないので中国という言葉が普通につかっている。特別なこだわりがあるのならともかく、そうでない場合、多くの人が使用している言葉を使った方が合理的なので。

# 言葉についての雑考・その2「看護婦・スチュワーデス」－御上の威光にみんなひれ伏せ

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2011年8月8日公開

00年代の前半だったか、テレビや雑誌から看護婦・スチュワーデスという言葉が消え、看護師・キャビンアテンダントという言葉が使われはじめて違和感を覚えたことがあった。

面白かったのは、普段フェミニズムに対して批判的だった保守系・右派系のメディアも、政府・行政機関が看護婦・スチュワーデスという呼称をやめて看護師・客室乗務員という言葉を使用しだしたら、命令されたわけでもないだろうに政府の方針に自ら従って、看護師・キャビンアテンダントという言葉を使いだした事だった。

もし政府・行政機関が看護師・客室乗務員という言葉を使用しなかった場合、民間人の学者や評論家が「職業の名称を性別と一致させるべきではない」と主張しても、多くの保守系・右派系メディアはそのような主張を鼻で笑っていただろう。

ところが政府・行政機関が「職業の名称を性別と一致させない方針」をとった途端、内心ではその方針に反対しているだろうに政府・行政機関に迎合してしまうのだから、笑いを乗り越して情けなくなってきた。

ま、それだけフェミニストたちの戦略・戦術が巧みだったということだろう。政府・行政機関が看護婦・スチュワーデスという言葉の使用を中止したら、右左関係なく国民が揃ってその方針に従うのだから。

社会の民主主義化にはメディアの役割が重要だが、マスメディアが御上にべったりつき従う体質をもっているのだから、日本の社会が民主化しないのも当然といえば当然かもしれない。

## ○看護婦・スチュワーデスの呼称に関して

「職業の名称を性別と一致させるべきではない」という主張には自分も同意する。だから、看護婦を看護師に、スチュワーデスを客室乗務員に言い換えた方針は間違っていないと思う。

男性の看護師を看護婦と呼ぶのはおかしいし、職業名が男性用（看護師）・女性用（看護婦）と2種類あるのは非合理的だし。ただ、看護婦・スチュワーデスという呼称自体を禁止しようとしているのなら、その方針はおかしいだろう。

「女性の看護師」を看護婦、「女性の客室乗務員」をスチュワーデスと呼ぶのは言葉の使用法として極めて合理的である。男女関係なく職業名を「看護師/客室乗務員」、男性の看護師・客室乗務員を「看護師/スチュワード、パーサー」、女性の看護師・客室乗務員を「看護婦/スチュワーデス」と呼ぶのが便利で合理的だと思う。（看護師と看護婦の発音が同じな点にやや難があるが。）

フェミニストのなかに、「女性の看護師」を看護婦、「女性の客室乗務員」をスチュワーデスと呼ぶことにすら反対している人がいるのかは不勉強にして知らない。マスメディアの人間のなかには、事なかれ主義から、あるいは過剰な自主規制意識から看護婦・スチュワーデスという言

葉の使用を自粛している人たちもけっこういそうではある。

補：wikipediaをみたらキャビンアテンダントは和製英語で、英語ではフライトアテンダント、キャビンクルーと呼ぶとあった。

[自分つつこみ]書き終わったあと見直してみたら、けっこうツッコミを受けそうにも感じた。看護師・看護婦を法律用語として看護師に統一した以上、マスメディアが看護師という呼称を使うのは、御上の威光にひれ伏しているわけではなく、きわめて合理的・現実的な態度だとはいえる。ただ、看護婦・スチュワーデスという言葉の使用を過剰に自主規制しているようにもみえるけれども。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年7月19日公開

1970年代まで（あるいは70年代前半頃まで）、日本の歌手の多くはNHK紅白歌合戦に出場すること、レコード大賞を受賞することに大きな価値や意義をみだし、また名誉としていた。

が、80年代にはいり、当時ニューミュージックと呼ばれていた音楽がレコード売上の主流をしめるようになると、NHK紅白歌合戦への出場を辞退する歌手・ミュージシャンも少しずつあらわれて、またNHK紅白歌合戦に出場すること、レコード大賞を受賞することに価値や意義をみださない歌手・ミュージシャンも徐々に増えていった。

そしてその傾向は年とともにつよまっていった。レコード大賞に関心のある人は現在では少数派にすぎないだろう。NHK紅白歌合戦の方は、レコード大賞に比べればまだ権威は残っているし、出場することに価値や意義をみだしている人は多い。それでも以前に比べれば、影響力や世間の関心が薄れていることは否定できないだろう。

日本の作家の意識や価値観は、1970年代頃までの歌手のそれに似ているなど感じる。芥川賞・直木賞を受賞することに大きな価値や意義をみだしている人がかなり多いだろう。だが、候補になることを拒否する人もあらわれている。（もっとも、昔から受章を拒否する作家は少数ではあるがいたと思うが。）

文学・小説の世界が音楽と同様の歴史をたどると、これから、候補になることを拒否する作家が徐々に増え始め、20年位たったら、有力作を書いた作家の多くが、候補になることを拒否する、なんて時代になっているかもしれない。

20年以上前から思っていたことだが、社会学者かノンフィクションライターが、日本の作家の芥川賞・直木賞に対する意識調査をやらないかなと思っていた。芥川賞・直木賞に権威を感じるか、両賞を受賞したいか、といった点を中心にして。

全員が本音で答えてくれたら、かなり面白い調査結果が出るんじゃないかと思っていた。だが、芥川賞・直木賞は文壇あるいは出版界の天皇のような存在で、批判することがタブーになっているようだから、まず実現はしないだろうけれども。

## 「文芸誌」における需要と供給のバランス

---

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年11月8日公開

この記事は元々は90年代半ばに書いていたものなので、現時点では内容がかなり古くなっています。

”「文芸誌」は二重の意味で需要と供給のバランスが悪いだろう。1つめは、読者の数（需要）と出版社・編集部側の売りたい数（供給）の関係で、需要の方が少なすぎるというバランスの悪さ。（90年代中頃には、文芸誌の売上とその雑誌が募集している新人賞の応募数がほぼ同じという話がちょっとした話題になっていた。）

2つめは、出版社・編集部側の書き手に対する需要と、書き手側の供給の関係で、出版社・編集部の要求をみたす書き手の供給量が不足しているというバランスの悪さ。（書き手側の供給の少なさは、人数の少なさというよりも売れる書き手が少ないという意味に解釈した方がいいかもしれない。）

このバランスの悪さを、単純に経済的な合理性だけから考えれば、各出版社が1誌ずつ「文芸誌」を発行しているという現状を改善し、各出版社が協力して1誌か2誌、非常に質・密度の高い「文芸誌」を出版すれば、状況は少しずつ好転していくかもしれない。

ただ、雑誌ごとに独自のカラー（あるいは文化や伝統といえるもの）があるから、それらを見捨てて経済合理性だけから文芸誌を統合するという考えは賛同がえられないだろう。

また、文芸誌の赤字は、単行本の売上でカバーしているそうだから、この案を実施した場合、売れる作家の本をどこの出版社から出すかで揉め事がおこる可能性もある。

それに、雑誌の数が減ると作品を発表する場所も減るから、多くの作家が開店休業状態に陥る可能性もあるだろう。

だが、出版社の経営状態が悪くなり、赤字の雑誌を発行し続ける余力がなくなれば廃刊・休刊に追い込まれる雑誌が増えるだろうから、余力のあるうちに対策を講じたほうがいいのではないだろうか。”

などということをして15年近く前に考えていたが、その後出版不況が深刻化して、こんな冗談半分のアイデアを言っている余裕もなくなってきたのかもしれない。言論誌・総合誌などは、多くの雑誌が廃刊・休刊に追い込まれたが、文芸誌の方は大丈夫なのだろうか。雑誌だけではなく、出版社自体がなくなるかもしれないとこまできてたりして……。

漫画家で、4人位がチームをつくり作品を発表している人たちもいるみたいだが、小説も同じような制作方式にしちゃえばいいんじゃない。

アイデアを出す人、執筆する人、広報担当としてメディアに出る人。広報は芸能人としての魅力・人気のある人に担当してもらい、バンバンメディア露出して話題作りをしてもらう。

どんなに質が高くても、話題にならない作品は存在すら知られず読まれさえしないのだから、もう何でもありでいいんじゃないか。でも、小説は漫画ほど売れないから、複数で1つの作品を作ると一人あたりの取り分が少なくなり生活出来ないおそれがあるか。

それに、文学や小説のコアな読者層はやらせや仕掛を嫌悪する人が多いだろうから、本を買ってくれる重要な客層が離れてしまい、結局は出版社が自分で自分の首を絞めることになりかねないけれどね。

ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年12月13日公開

柄谷行人のインタビューや対談をいくつか読んでみたが、エンターテインメント（娯楽作品）は評価していないだけでなく、興味も関心もないらしい。「批評空間」の共同編集委員だった浅田彰は、思想や芸術に造詣が深いだけでなく、エンターテインメントにも一通り目配せしていた。

この違いは、個人的な趣味・嗜好、価値観の違いにすぎないのかもしれないが、世代的（時代的）な影響も大きいのかもしれない。柄谷世代の知的エリートにとっては、「娯楽作品は大衆が楽しむもので、知的エリートが触れるものではない」といった価値観が支配的であったのだろう。大衆小説などを愛好している学生は、仲間内から馬鹿にされたり低くみられるといったことがあったのかもしれない。柄谷行人と同世代と思われる大学の教授が、大衆小説のファンだったことを恥ずかしそうに語っていた雑誌の記事が妙に印象に残っている。

一方、テレビが普及し大衆社会化が進行した浅田彰の世代では、エンターテインメントのことを知らない学生は、勉強ばかりしている世間知らずとして逆に揶揄の対象となっていたかもしれない。回りの人間に低くみられないためには、娯楽作品の知識も一通り仕入れておく必要があったのかもしれない。（ただし、これは浅田彰が回りの人間から低くみられることを嫌う性格だったら、という仮定の話にすぎない。本人は回りの評価など気にしない人間で、単に趣味として娯楽作品が好きだったただけなのかもしれないが。）

浅田彰より一回り以上若い東浩紀は、現代思想と同じ位アニメやゲームなどのサブカルチャーが好きで、現代思想を語るのと同じ比重をもってサブカルチャー（エンターテインメント）を批評の対象にしていたらしい。（サブカルチャーをまともな批評の対象としたことに対してはかなり批判があったらしいが。）

東浩紀より下の世代の宇野常寛は、サブカルチャー（エンターテインメント）を批評の対象にしているという点で上記の3人とはかなり異質といえるかもしれない。

エンターテインメントには興味関心のない柄谷行人。

エンターテインメントにも目配せをしていた浅田彰。

思想とエンターテインメントを同列で批評の対象としていた東浩紀。

エンターテインメントを批評の対象としている宇野常寛。

名の知れた批評家・言論人のエンターテインメントに対する接し方が、時代の変化を感じさせて結構興味深かった。主流文化の大衆化が時代とともに進行した現象を象徴しているのかもしれない。